

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 12 日現在

機関番号：17401

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2016

課題番号：26580148

研究課題名(和文)水俣病映像人類学の可能性—土本典昭を中心として—

 研究課題名(英文) Exploring the possibilities of visual anthropology for Minamata Disease  
Disaster: Based on Tsuchimoto Noriaki's Films

研究代表者

慶田 勝彦 (KEIDA, Katsuhiko)

熊本大学・人文社会科学研究部・教授

研究者番号：10195620

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、挑戦的萌芽研究として十分な成果をあげている。以下がその主要な成果である。

(1) 土本典昭作品に映像人類学的にアプローチし、人類学的水俣病事件への関わり方を見出すことができた。水俣病事件は映像人類学的には土本作品以外にも興味深い素材(ユージン・スミスの写真等)が豊富であることを確認した。(2) 土本典昭監督の水俣関連映像に関するオリジナルの資料収集とその電子化、ファイル化を行うことができ、将来的には独創的な研究を展開する資料群の一部を構築できた。(3) 本研究には若手研究者と外国人研究者を組み込むようにし、本研究が熊本大学を拠点とした国際的な研究へと成長してゆくような体制作り成功した。

研究成果の概要(英文)：This research has produced the following fruitful results: 1) This research examined Tsuchimoto Noriaki's documentary films about methylmercury poisoning ("Minamata Disease") using visual anthropological approaches, and has created an anthropological commitment to the "Minamata Disease Disaster" through examining the rich visual images related to "Minamata Disease" such as the films of Tsuchimoto's and the photography of Eugene Smith's. 2) Part of Tsuchimoto's original audio tapes related to his famous films such as "Minamata: the Victims and Their Worlds" were collected by our research group at Kumamoto University. Through analyzing these materials this research has made a great contribution to both visual anthropology and to "Minamata Disease" Studies. 3) The research leader incorporated both young and international scholars into this research, and created a Kumamoto University based research organization that will further develop international anthropological studies.

研究分野：文化人類学

キーワード：映像人類学 水俣病事件 土本典昭 水俣病関連映像 水俣病関連写真 芥川仁 写真と人類学

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 水俣病事件に関する映像や写真は多数あり、これらの映像や写真への人類学的アプローチはその潜在的な研究価値が高いにもかかわらずほとんどなされてこなかったという事実から本研究は出発した。

(2) 映像人類学的にアプローチする素材として土本典昭監督の作品を選んだ。その理由は二つあった。ひとつは水俣病事件にとって土本が撮った水俣病患者の世界は社会的にも、また、ドキュメンタリー映画としても極めて評価が高いし、人類学の領域でも知られた監督であるという点である。すなわち、土本作品は一般性、社会性が高く、その評価も確立していたからである。その一方で、国内において映像人類学的な研究はほとんどなく、また、人類学が水俣病研究に関わる意義やその方法を検討するのに最も適切な作品群が土本の映像であると判断したのが二つ目の理由である。さらに、申請者は2009-2010年度に英国オックスフォード大学社会文化人類学研究所に客員研究者として所属していた際に、映像人類学の理論と実践の新しい展開に刺激を受け、その過程で土本の映像が国際的にはドキュメンタリーおよび映像人類学の巨匠ロバート・フラハティとの関係で評価されているという事実を知ったことも研究開始当初、土本典昭作品を本研究の研究対象にした背景にあった。

(3) 申請者が所属する大学は熊本大学である。故・丸山定巳(社会学)と富樫貞夫(法学)、故・原田正純(医学部)が水俣病研究会を通じて社会的にも、学術的にも水俣病事件の解明に重要な役割を果たして経緯があり、熊本大学におけるこれらの水俣病研究の資料群を批判的に検討し、継承してゆく役割があるという意識も本研究課題着想時には含まれていた。

## 2. 研究の目的

(1) 土本典昭作品に映像人類学的にアプローチし、人類学的水俣病事件への関わり方を見出す。

(2) 土本典昭作品を含む水俣病事件に関する映像・写真資料の鑑賞、収集、整理、分析等を推進する拠点を熊本大学内部に作る。

(3) (1)においては人類学的水俣病事件研究の解明を推進し、(2)においては熊大人類学を拠点とした地域社会との連携強化を推進しながら、将来的には国際的な研究へと展開するための基盤を作る。

## 3. 研究の方法

以下、上記「2. 研究の目的」(1)～(3)に対応した研究の方法を述べる。

(1) 熊本大学に映像人類学グループを作り、そのグループを中心に土本作品ならびに他の素材についての映像人類学的アプローチを理論面、実践面の双方で検討する。

(2) 熊本大学学術資料調査研究推進室(水

俣病部門)を中心として、映像・写真等の資料収集や整理を行う。

(3) 海外の研究者(日本在住の外国人研究者含む)および海外の諸機関との連携をもつ研究者を本研究に組み込みながら、海外との研究連携を促進する。特に国内外の若手研究者の育成を視野に入れた研究組織にする。

## 4. 研究成果

上記「2. 研究の目的」に照らして、以下に研究成果をまとめる。本研究は全体としては当初の予定以上の成果につながったが、2016年度に生じた熊本地震、ならびに研究協力者の丸山定巳の急逝等で(1)の成果が研究期間中に学术论文の形にはなっていない点が想定外であったが、研究協力者だった丸山定巳関係の追悼冊子2冊および日本文化人類学会主催のシンポジウムと研究会で本研究成果にも言及した。

(1) 土本典昭作品への映像人類学的なアプローチに関しては、第一に申請者の研究室(文化人類学・慶田研究室)を中心に、KAFS(Kumamoto Anthropology Film Society: 熊本人類学映画会)を立ち上げ、映像人類学に関する理論の検討、土本作品を含む映画鑑賞会と研究会(川瀬慈氏主催の映像人類学フォーラム等を通じた広報活動含む)を各年度4～6回ほど行った。主たるメンバーは慶田勝彦(研究代表者)、香室結美(熊本大学・特定事業教員)、ジョシュア・リカード(熊本大学グローバル教育カレッジ)、田口由夏(熊本大学大学院・慶田ゼミ修士課程)、松永由佳((熊本大学大学院・慶田ゼミ修士課程)であり、本研究活動を通じて水俣病事件への理解を深めると同時に、土本典昭監督を含む水俣病関係の映像・写真へのアプローチを検討した。その結果は次の(2)とも関連するので、ここでは理論的な方向性の成果のみに言及する。昨今の映像人類学的研究動向を検討した結果、水俣病事件ならびにその社会史に関する映像・写真資料を活用した映像人類学的アプローチによる研究は、社会的にも、学術的にも、また、国際的にも十分に価値がある研究へと展開できるという確信を得た。そして、研究対象を土本典昭作品のみに限定しないほうがよく、英国の社会人類学者・映像人類学者のR. Werbnerが提唱した「カウンター・ポイント」(Werbner 2011)―研究代表者にとっては人類学者を含む各アクターの政治性が相互反照的に可視化される点が興味深く、本研究にも応用できると感じた―を形成してゆくような映像人類学的アプローチを水俣病事

件については採用してゆくことが上記グループでは確認された(「学会発表」参照)。さらに、水俣病事件の社会史に関しては、写真へのアプローチが欠かせないことが明確になったし、むしろ、今後の研究費獲得や資料収集等の観点からも写真がもつ潜在的な研究価値は理論、資料、実践のどの領域においても極めて高いことを確認した。なお、このような認識は Elizabeth Edwards, Marcus Banks, Christopher Morton などの映像人類学者の著作や論文(特に写真を焦点化したもの)から得られている。

- (2) 本研究では、諸事情で当初計画していたようには土本典昭作品自体の映像人類学的な研究を理論的に推進することはできなかったが、土本監督が遺した資料に関しては重要かつ独創的な進展があった。ひとつは熊本大学学術資料調査研究推進室委員(水俣病部門)である有馬澄雄(研究協力者)の協力で、シグロ(旧青林舎)配給の映像(土本作品)のオリジナル音声の電子化ならびに土本監督のオリジナル資料の一部(主として水俣関係)の電子化とファイル化を行うことができたことである。これらの資料は土本典昭およびシグロ関係の映像作品研究を展開するための重要な基礎資料としての価値があり、この資料収集と整理だけでも挑戦的萌芽研究としては卓越した成果のひとつになったと考えている。もうひとつは、当時の土本典昭作品に関わったメンバー(青池、小池、佐々木、一之瀬、有馬等)たちとの連携強化であり、今後はなんらかの形で各メンバーが相互に協力しながら土本典昭作品についての社会的、学術的意義を問い続けてゆくことを確認できたのも今後の研究にとっては大きな成果となった。

- (3) 上記研究成果(1)においては、熊本大学グローバル教育カレッジの教員ジョシュア・リカード(映像人類学・パレスティナ研究)が理論研究や KAFS 運営に積極的にコミットし、本研究課題のグローバル化や国際化に貢献している。また、彼の出身大学(博士号取得大学:英ケント大学)との研究連携の可能性についても検討済みであり、今後はケント大学やオックスフォード大学(研究代表者の客員研究所属機関)、マンチェスター大学(R.Werbner 教授との研究連携も構築済)等との国際共同研究を推

進するための研究連携ネットワークは本研究期間内に構築している。また、本研究期間中に招聘したロッセラ・ラガッチ(トロムソ大学、映像人類学)との研究連携も構築済みであり、海外との研究協力の基盤は十分に整っている。さらに、イタリアの映像作家シモーネ・グラッシと KAFS メンバーとで水俣を訪れ、土本作品との関連がある地域の動画、写真の予備撮影を一泊二日で行った。予備調査および撮影を行い、本活動の継続性や発展性について検討した結果、水俣病をテーマとした日本、イタリア、英国、ノルウェー等のスタッフからなる国際的な映像製作は大変魅力的な企画であるし、社会的なインパクトも期待できるという意見で一致したが、本格的な撮影に入るためには安定した資金獲得とスタッフの調達が不可欠であること、また、ワークショップ等を通して水俣病および水俣病研究について国籍が異なるスタッフ間の相互理解を深めてゆくことが必要であるとの認識にいたった。まずは、本研究自体のいくつかの成果を理論的に、また実践的に対外的に示したあと、資金調達を含めて、具体的な撮影活動に入るようになった。今後も、今回の水俣での現地撮影に参加した全員は継続的に研究連携を維持してゆくことで合意した。

- (4) 上記以外に、本研究を通して得ることができた成果としては、第一に、熊本大学学術資料調査研究推進室(水俣病部門)との連携を深めることができた点である。特に、定期的に推進室セミナーを開催した意義は大きかった。毎年度、セミナーに参加した研究代表者をはじめとする人類学関係者ならび各参加者の水俣病事件への理解が格段に深まったことは本研究に深みを与えてくれた。実際、熊本大学の内外で本研究課題を媒介とした水俣病研究が認知、評価されはじめたのは極めて大きな成果であった。第二に、本研究から新たな着想を得て、より組織的に水俣病事件を解明するために申請した科研費(基盤研究A)が2016年度より採択されたのも大きな成果である。本挑戦的萌芽研究での成果がなければ、基盤研究Aの獲得ならびに、研究を推進するための研究拠点を形成することはできなかったことは明白であり、本研究が果たした意義ははかりしれない。また、人類学を中心とした水俣病事件とその社会史の人文社

会科学的な研究が学術的かつ社会的に促進されることの意義は人類学分野にとっても大きいと考えている。第三に、上記のような水俣病研究を焦点化した諸活動は、熊本大学の研究や教育にも影響しはじめ、2017年度から開始された新教育プログラム「肥後熊本学」にも研究代表者が世話役を務める「水俣病の社会史」が含まれることになり、また、熊本大学附属図書館にも水俣病事件に関する映像や文献のコーナーが新設されたのも本研究の間接的な成果のひとつである。また、2016年度から設置された熊本大学文書館においては水俣病研究に関係する大学内外の資料収集、整理、公開、研究利用等を文書館のひとつの柱にすることが明確になりつつあるのも本研究の効果のひとつである。第四に、本研究は若手研究者育成にも貢献している。本研究活動が評価され、2016年度から水俣市水俣病資料館から研究代表者が受託研究を依頼されることになったが、本科研の研究協力者であった香室結美（本学博士号取得者）の映像人類学や博物館人類学への取組みが認められ、上記水俣病資料館にコーディネーター（熊本大学産官学連携研究者、特定事業教員）として勤務（任期つき）することになった。香室は本研究での議論を活かし、上記資料館において芥川仁（水俣病関連の写真家としても有名）の写真展を開催したり、映像や写真に関するイベント等を企画したりするなど、水俣病事件と映像人類学的な実践とを結びつけた活動を行っているのも本研究の成果のひとつとして言及しておきたい。また、研究協力者として参加している人類学者の青木恵理子（龍谷大学）、下田健太郎（お茶の水女子大学）、川瀬慈（国立民族学博物館）、大学院生の田口由夏、松永由佳（2名とも熊本大学大学院修士課程）も映像人類学や水俣病事件への関心を深めながら、本研究課題に関する共通の理解を理論的にも、実践的にも深めることができたのは今後の研究を展開する上での大きな成果となった。

以上から、本研究は学術論文のかたちでの成果は十分ではない一方で、挑戦的萌芽研究としては予想以上の成果をあげている。以下の点の特筆すべき成果としてまとめておきたい。第一に、本研究は地域性（熊本、水俣地域が主）を活用した研究を推進し、その成果が認められつつあるという点である。水俣市との連携を通じて熊本大学独自の研究を

展開しており、その研究への評価は上述したように具体的かつ多様な形で現れてきている。第二に、写真と映像を媒介とした水俣病事件への人類学的なアプローチは理論的にも、実践的にも大きなインパクトが期待できることを諸活動から確認することができた点である。第三に、本研究を通じて、国際的な研究へと展開するための研究ネットワークの基礎を構築することができたが、その活動の中に若手研究者と外国人研究者を組み込むことに成功してきたことである。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

##### 〔雑誌論文〕(計2件)

丸山定巳先生お別れ会実行委員会編（田口宏明・田中雄次・松浦雄介・向井良人・慶田勝彦・香室結美）『丸山定巳先生お別れ会の記録—二〇一五年三月二八日』、2015年。

慶田勝彦 「丸山定巳—「空気」をじわっと「飲み崩す」社会学者—、『いのちの海の記憶—丸山定巳先生追悼文集—』「丸山定巳先生を偲ぶ会」実行委員会編、Pp.12-14、2015年。

##### 〔学会発表〕(計2件)

慶田勝彦 「死者のブーツ」とルーツ・オキナワ：人類学的自己形成における〈影〉あるいは〈生きた魂〉の役割、沖縄民俗学会・九州/沖縄地区研究懇談会合同主催研究会（日本文化人類学会）、沖縄県立大学、2015年11月28日。

慶田勝彦、「カウンター・ポイント」としての人文・社会科学方の実践に向けて、シンポジウム・「現代社会における人文・社会科学とは何か—文化人類学からの応答の試み」、日本文化人類学会主催、九州大学・西新プラザ、2016年11月06日。

##### 〔図書〕(計0件)

##### 〔産業財産権〕

##### 出願状況（計0件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

##### 取得状況（計0件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.let.kumamoto-u.ac.jp/ihs/soc/anthropology/keida/2017/05/post-8.html>

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

慶田 勝彦 (KEIDA KATSUHIKO)

熊本大学大学院人文社会科学部 (社会・人類学) 教授

研究者番号：10195620

##### (2) 研究分担者

なし ( )

研究者番号：

##### (3) 連携研究者

なし ( )

研究者番号：

##### (4) 研究協力者

丸山 定巳 (2014年12月逝去)：熊本大学名誉教授、熊本大学学術資料調査研究推進室員

有馬 澄雄 (ARIMA SUMIO)：熊本大学学術資料調査研究推進室員

富樫 貞夫 (TOGASHI SADAŌ)：熊本大学名誉教授、熊本大学学術資料調査研究推進室員

高峰 武 (TAKAMINE TAKESHI)：熊本日日新聞論説主幹

香室 結美 (KAMURO YUMI)：熊本大学特定事業教員

下田 健太郎 (SHIMODA KENTAROU)：お茶の水女子大学 (PD)

ジョシュア・リカード (JOSHUA RICARD)：熊本大学グローバル教育カレッジ

シモーネ・グラッシ (SIMONE GRASSI)：イタリア人映像作家

高橋 進之介 (TAKAHASHI SHINNOSUKE)：熊本大学大学院先端機構

向井 良人 (MUKAI YOSHITO)：熊本保健科学大学、熊本大学学術資料調査研究推進室員

芥川 仁 (AKUTAGAWA JIN)：写真家

松永 由佳 (MATSUNAGA YUKA)：熊本大学大

学院・社会文化科学研究科 (修士課程)  
田口 由夏 (TAGUCHI YUKA)：熊本大学大学院・社会文化科学研究科 (修士課程)